

I テーマ設定の理由

小さい時から家にある、マザー・グースの絵本が好きで、しばしば読んでいた。そこで、今年マザー・グースのことについて研究しようと思ったが、それだけではやりがいがないので、わらべ唄と比較することを思いついた。

II 研究方法

- マザー・グースを、分類されたものからいくつか種類をしぼり、それに合わせてわらべ唄も選ぶ。そして、それを比較する。
- リズムについてのことをまとめる。

III 研究内容

マザー・グースとは元来、英国の民間伝承を集成したものに対する伝説的作者名であるが、この名はどういう訳か米国では伝承童謡そのものを指すのに使われることが多く、最近では英国もそういう意味を指す場合がある。

マザー・グースは「子供部屋からうまれた」と言われるが、それより「子供部屋の中に保存された」というほうが正確だという。マザー・グースの多くは、子供向きに作られたものではなく、上流階級から発生したものである。(その他、すぐれた詩人の詩や民謡がマザー・グースになったりした。)

それはなぜかという、17・18世紀には子供は大人の縮小版として扱われたし、1740年以前には子供向きの出版物が少なかったので、子供は大人の文学を読むことが多かったようだ。マザー・グースは大人のものといってもおかしくない。(子供のものは、遊戯の唄と子守唄くらいだと思う。)

(1) 言葉遊びの唄(語呂あわせ)

わらべ唄には語呂あわせが多いが、マザー・グースにも語呂あわせはあるのだろうか。

— マザー・グースより —

old Mother Hubbard
Went to the cupboard
To fetch her poor dog a bone, [bɔ:n]
But when she come there
The cupboard was bare
And so the poor dog had none [nʌn]

She went to the baker's
To buy him some bread [brɛd]
But when she come back
The poor dog was bead. [bi:d]

She went to the undertaker's
To buy him a coffin [kɔ:fin]
But when she come back
The poor dog was laughing. [læfiŋ]
(以下略)

— わらべ唄より —
あのここのこ たんばのーやこ
わらーわやろか
わらーわや せどでもかどでもひろう

そじゃ 二わやろか
わしゃにわはかん
ほうこうすりゃこそ にわはきまする

そじゃ 三ばやろか
わしゃ さばつらん
りゅうしならこそ さばつりまする
(以下略)

子供の唄は、“リズムがよく” “メロディ・歌詞のくり返しが多く” “簡潔で歌いやすい”ということが特徴だ。この二つの歌も、一部だけが変わっている他には、歌詞に変化はなく、しかも短いので、歌いやすい。

発音記号を調べたところは、同じような発音で、実際発音してみても、とてもよく似た単語だった。(語呂あわせをしている)

これらのことから、「言葉遊びの唄」については、マザー・グースとわらべ唄はよく似ていると思う。

(2) かぞえ唄

— マザー・グースより —

One, two, [tu:]
Buckle my shoe: [ʃu:]
Three, four, [fɔ:r]
Knock at the door: [dɔ:r]
Five, six, [siks]
pick up sticks: [stiks]
(以下略)

— わらべ唄より —

いも にんじん きんし
しいたけ ごぼう どんぐり
ななくさ はまぐり くわい じゅうばこ

2つの唄に共通していえることは、かぞえ唄なのに、語呂あわせもいっしょにしているというところだ。わらべ唄には、他にも「いちでいもくって にでにげて……」という様なものもあるが、これもその部類に入る。

今まで、いろいろな歌詞を見てきて思ったのは、マザー・グースではわらべ唄にはあまり見られない擬人化が、大きな要素になっているということだ。

〔8〕子守り唄

—マザー・グースより—

ねんねころりよ きのこずえ
かぜがふいたら ゆりかごゆれる
えだがおれたら ゆりかごおちる
あかちゃん ゆりかご なにもかも

—わらべ唄—

坊やはよい子だ ねんねしな
ねんねのお守は 何処へ行た
あの山越えて 里へ行た
里のお土産に 何もろた
でんでん太鼓に 笙の笛
起上り小法師に 振り鼓

わらべ唄の中では、子守り唄は数が多く、哀切感の漂うものが主なような感じがする。母親の、赤ん坊に対するやさしさを表したものと、小さな子守りの女の子のつらさを表したものがあると思う。「坊やはよい子だ…」の唄では、赤ん坊をねかせするために、赤ん坊の喜びそうなおもちゃをだして、美しく・楽しい夢を描いてみせるやさしさがある。

マザー・グースの中では、子守り唄は比較的少ない。母親のやさしさを表したものは少なく、だいたいがからっとして、早く赤ん坊をねかせようとするものが多い。「ねんねころりよ きのこずえ…」は、有名な子守り唄である。「あまり高くのほりすぎると結局は落ちてしまう。」という、いましめ的な意味も汲みとることが出来、日本人の子守り唄の感覚とはだいぶちがう。

〔4〕なぞなぞ唄

—マザー・グースより—

○むらさき きいろ あか みどり ○うちにもいっばい あなにもいっばい
おうさまおてがとどかない なのおわんじゃくみとれない
おきさきさまとどかない (よる)
ときのくろまくノールもおてあげ

このなぞといて やっつかぞえるあいだにね

(にじ)

—わらべ唄より—

○うえはおおみず ○おまえあっちけ うらこっちく
したはおおかじ なあん
なあん (おび)
(おふろ)

マザー・グースには“王”という言葉がよく使われている。それから、他の唄にも言えることだが、頻りに人名をだす。それが実在した人のことも、そうでないこともあるが、意味もなく名前をだしていることも多い。“王”という言葉は、権力の象徴として使われている。

両方に共通していることは、このなぞなぞ歌からだけでは、とてもではないが答えがだせないようなものもあるが、伝承童謡となるほどのものだから、子供達はすでにこの答えを知っていて、なぞなぞ遊びをしていたのだろう。

〔5〕指遊びの唄

—マザー・グースより—

このこぶたさん かいものに
このこぶたくん おるすばん
このこぶたくん ビフテキたべて
このこぶたさん はらっぺこ
このこぶたくん ないてる ウィー ウィー ウィー
はくはまいごになっちゃった

—わらべ唄より—

ずいずいずっころばし ごまみそずい
ちゃつぽにおわれて とっぴっしゃん
ぬけたら どんどこしよ
たわらのねずみが こめくってちゅう ちゅう ちゅう ちゅう
おっとさんが よんでも
おっかさんが よんでも
いきっこなしよ
いどのまわりで おちゃわんかいたのだあーれ

遊び方もちがいが、意味のない歌詞なので、比較のしようがなかった。動物がでてくる。これに限らず、マザー・グースには“擬人化”が多い。

〔6〕 関所遊びの唄

— マザー・グースより —

ロンドン橋がおこちる
おこちるったら おこちる
ロンドン橋がおこちる
きれいなきれいな おひめさま

ねんどときとでつくろうよ
つくろうよったら つくろうよ
ねんどときとでつくろうよ
きれいなきれいな おひめさま

(中略)

もしもみはりがねむったら
ねむったら ねむったら
もしもみはりがねむったら
きれいなきれいな おひめさま

よなかにパイプをすわせよう
すわせようたら すわせよう
よなかにパイプをすわせよう
きれいなきれいな おひめさま

「ロンドン橋」は、造っても造ってもこわれてしまう橋だった。そんな橋の工事にはいけにえがつきもので、「きれいなきれいな おひめさま」というのは、人柱としてロンドン橋の基礎工事にうめられた女の人だという説もある。「みはり」は、人柱の象徴ではないかと思う。「とおりゃんせ」も、江戸時代の関所通行にまつわる暗い記憶が底に沈んでいるといわれる。

この唄から、昔の悲しい思い出が感じられる。「ロンドン橋」も「とおりゃんせ」もそういう悲しい思い出の唄だから、今でも根強い人気を保っているのではないだろうか。

〔7〕 リズム

前にも書いたように、リズムは、子供の唄に大切なことだ。リズムとは、ほぼ等しい時間的間隔をおいて、音の強弱が反復されることだと思う。具体的には、英語の場合は普通、格調のことを指す。マザー・グースのリズムは、例えば

Tweedledum and Tweedledee……
Jack and Jill went up the hill……

— わらべ唄より —

とおりゃんせ とおりゃんせ
ここはどこのはそみちじゃ
てんじんさまのはそみちじゃ
ちいっとおしてくだしゃんせ
ごようのないものとおしゃせぬ
このこのななつのおいわいに
おふだをおさめにまいます
いきはよいよい かえりはこわい
こわいながらも とおりゃんせ
とおりゃんせ

というような、強弱四歩格が圧倒的に多い。

〔8〕 マザー・グースの英語と日本語の唄

マザー・グースに使われている英語はアングロ＝サクソン系の英語である。英語は、ノルマン征服の結果、文化的には知的な言語になっていくのだが、民族固有の言語というものは、感情や情緒にうったえる力がある。マザー・グースの英語はまさに英国固有のアングロ＝サクソン系の英語で、英国民の心を強くゆさぶる力を持っているのだ。

日本語はというと、固有の日本語は万葉集に使われている大和言葉である。

つまり、アングロ・サクソン系の英語も、大和言葉も昔から民衆が口伝えによって親しんできた言葉であるので、何百年たっても消えない持続性をもっているのである。

Ⅳ ま と め

まず思ったことは、どちらも民族特有の表現があるということだ。「口伝え」ということもあつたか、どちらも土くさい印象をうけた。比較する際、なかなか適切な言葉が浮かばなかった。そういう、言葉ではなかなか表すことができない「民族特有の感情」が流れているから、何百年たっても消えることなく残っているのだと思う。

違っていると思った点は、わらべ唄は全体に見て単純だったこと。種類も、遊びの唄・子守り唄・動植物の唄・歳時の唄などが主で、内容や比喩も比較的単純だった。

Ⅴ 感 想

マザー・グースの絵本を読んだりするのが好きなので、割と楽しくできた。ただ、計画的でなかったので、急いでやって、内容がうすくなったところもある。文献が見つからずに苦労した時もあったので、あとで付け加えたりもした。

違う民族の文化でも、底に流れる心は同じなんだと改めて感じた研究だった。